

「旅の目的地は場所とはかぎらない。むしろ、新しいものの方である」とヘンリー・ミラーは書いているが（『ビッグサーとヒロニスム・ボッシュのオレンジ』）、新しいものの方を見方を獲得してしまっただが最後、もう以前の生活に戻れなくなることがある。

ハリウッドの反逆児だった俳優マーロン・ブランドは、『戦艦バウンティ』（1962年）のロケ地、タヒチ諸島に行ったことによって人生の航路を変えることになった。タヒチ諸島に楽園を見出し、島の娘マイミチを演じたタリタ・テリピアと結婚する。67年、ブランドはタヒチのテティアロア環礁を丸ごと買い、以後、役者の仕事はテティアロアの環境維持の資金稼ぎと割り切り、この地を自分の聖地として頻繁に訪れるようになった。

映画『戦艦バウンティ』は実話に基づいている。18世紀末にイギリス海軍の武装船バウンティ号で起きた、艦長に対する反乱事件である。バウンティ号は、タヒチ島からパンノキを西インド諸島に運ぶ任務を負っていた。艦長はウィリアム・ブライ。かつてキャプテン・ジェームズ・クック指揮下のレゾリュション号で航海長を務めたこともある士官だった。厳格なブライ艦長に対し、航海士フレッチャー・クリスチャン（マーロン・ブランドが演じたのはこの人）以下が反乱を起こすのだ。原因はさまざまに論じられているが、乗組員がパンノキを搭載するために滞在したタヒチ島が楽園のように快適だったことも理由の一つとされている。滞在中にクリスチャンはタヒチの女性と結婚し、多くの船員も現地生活を楽しんだ。そのため、苛酷なブライ艦長の指揮下での劣悪な船内生活環境に戻ることはできなくなったという。タヒチを愛して「島の娘」と結婚し、ハリウッドの慣習にいつぞう背いたブランドの人生と重なって見える。



Tetiaroa Atoll
テティアロア環礁

タヒチに魅了されたアメリカ人俳優、マーロン・ブランドが個人所有していたテティアロア環礁。今年、その環礁の一部にラグジュアリーなプライベート・エコリゾート「ザ・ブランド」がオープン。http://www.thebrandco.com/

Marlon Brando and Tarita Teriipia
マーロン・ブランドとタリタ・テリピア



3 ザ・ブランドのバスルーム。プライベートアイランドだけに、開放的ながらプライバシーは守られる。4 ザ・ブランドの客室は全室プール付きのヴィラ・スタイル。5 軍服に身を包んだ海尉役のブランドと、トップレスの上半身にレイをかけた島娘役のタリタ。『戦艦バウンティ』の1シーンより。

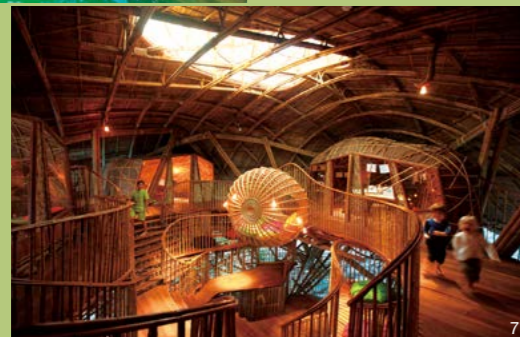


The Brando
ザ・ブランド



タイのシャム湾、カンボジア国境近くに浮かぶクッド島のエコ・リゾート、ソネバキリ。http://www.soneva.com/ 日本でのお問い合わせ先/フォーエバーアフター・ジャパン (ソネバ担当) ☎03-6804-3143 6 クリフ・プールヴィラ・スイートの客室。7 The Denと呼ばれる子どもたちの遊戯施設も、地元で生える竹や木を多用したナチュラルでエコな建築。

Soneva Kiri
ソネバキリ



7

Richesse Oblige

リシェス・オブリージュの精神

Vol.9

【未知を求めた旅の果て】 Searching for "Terra Incognita"

社会に階級が存在した時代、アッパークラスには「ノーブレス・オブリージュ」が課せられていました。クラス社会が（表向きは）なくなった現在、その自己犠牲の精神は富裕層に引き継がれています。今回は、ひと昔前までは特権階級にのみ許されていた“旅（=冒険）”について、考察します。

Text : KAORI NAKANO Realization : KAZUHIRO NONAKA

文/中野香織



Marlon Brando and Tarita Teriipia
マーロン・ブランドとタリタ・テリピア

タヒチが舞台の映画『戦艦バウンティ』の1シーン、マーロン・ブランド（左）とタリタ・テリピア。マーロン・ブランドはタリタと3度目の結婚をしている。

中野香織
Kaori Nakano
なかの・かおり ●エッセイスト、服飾史家。過去2000年分のファッション史から最新モード事情まで、幅広い視野から研究、執筆、レクチャーを行っている。東京大学大学院修了、英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆家。2008年より、明治大学 国際日本学部 特任教授を務めている。中野香織オフィシャルブログ / http://nakanakaori.cocolog-nifty.com/

2.5 Memo Giddery/Meyer/Getty Images

ブランドの没後10年にあたる今年の7月、彼が守り続けたテティアロアにラグジュアリー・リゾート「ザ・ブランド」がオープンした。タヒチ島から専用機で20分、専用飛行場を備えたプライベートアイランドに到着すると、手つかずの自然に囲まれた、オール・インクルーシヴのリゾートが待っている。

名優の思いを受け継ぐ「ザ・ブランド」は、何よりも環境保護の担い手であることを謳う。太陽エネルギーやココナツオイルによる再生可能エネルギーを中心とする、世界初のゼロ・エネルギー使用リゾートで、CO2の排出もゼロを目標としている。いわば21世紀型ラグジュアリー・エコ・リゾート。

環境保全を目指しながら、都会以上に快適な時間と場所を提供するリゾートは、エシカル志向の強い最近のトレンドとしてほかにも続々誕生している。例えば、タイのクッド島。昔からの原風景を残す自然環境のなかに、ラグジュアリー・エコ・リゾート、「ソネバキリ」がある。ヴィラは36棟で、すべてプライベートプール付きである。「ソネバ」グループの合言葉は「News, No Shoes」（ニュースを見ない、靴を履かない）。靴を脱ぎ捨てて素足で過ごすことができる非日常の快楽を保証する。

掲げるコンセプトは「SLOW LIFE」。英単語の頭文字をつなぎ合わせた結果の「スロウライフ」なのだが、その単語とは、SUSTAINABLE（持続可能）、LOCAL（地元で根づいた）、ORGANIC（有機的な）、WELLNESSES（心身共に健康な）、LEARNING（学びがある）、INSPIRING（刺激がある）、FUN（楽しい）、EXPERIENCES（数々の経験）。

環境への負荷を最小限に抑えるよう配慮された場所で、日常生活で疲れた心身を癒しながら、土地の産業を活性化させ、経済を潤すことに貢献し、学びも得られるリゾート、このコンセプトはリシェス・オブリージュの精神ともきわめて相性が良い。

誰よりも遠く、人間が行ける果てまで。そんな思いが命を賭した旅の動機に

そのようなリゾートの増加を歓迎する一方、一抹の疑問もよぎる。出かける前から目的地の情報を豊富に与えられる現代のポピュラーな「旅」において、ブランドやクリスマスチャンが経験したような、人生の航路を変えてしまうほどの出会いや発見の感動は得られるのだろうか？ まだグーグルマップも存在せず、観光写真が溢れるSNSもなかった時代、人はどのような思いで旅をし、旅は人や世界に何をもたらしてきたのだろうか。

地球にまだ「誰も知らない」ユーロピアや黄金の地や幸福諸島エリュシオンがあると信じられていた時代、野心ある探検家はそれを開拓する旅に出た。香料、金銀、未知のトレジャーや動植物、学術的な発見や成果などの見返りを期待して、国家は探検家を支援し、貴族が探検家に投資することもあった。投資家は私的な利益を期待するが、船が難破すれば財産を失う。一種のギャンブルである。しかし、成功の暁には、マテリアルな成果もさることながら、なによりも、世界に「新しいものの見方」という公益がもたらされた。後世の視点で見れば、立派なリジェス・オブリージュの行為である。

体力と知力と気力に富む者が、探検の旅に出るということにおいても、命をかけるという

イルランド生まれのアーネスト・シャクルトン（1874〜1922）が、南極探検の同志をつるために出した広告である。

「求む男子。至難の旅。わずかな報酬。極寒。暗黒の長い日々。絶えざる危険。生還の保証なし。成功の暁には名誉と賞賛を得る。アーネスト・シャクルトン」。

この広告に対し、名誉と賞賛のみを求めて集まった男子が、5000人以上にのぼったという。戦争となれば真つ先に最前線で戦った貴族の子弟のノブレス・オブリージュの精神にも通底するものを感じさせる逸話である。

宇宙、それとも心の深淵？
現代人に残された前人未到の地は

シャクルトンは南極大陸横断を目指し、1914年、エンデュアランス号で出航した。南極大陸を前にして氷塊に阻まれ、身動きが取れなくなる。10カ月ほど氷塊に囲まれたまま漂流を続けるが、エンデュアランス号が崩壊しはじめたため、船を放棄し、徒歩とボートで氷洋上を踏破し、エレファント島に上陸。さらにそこから救命ボートで航海したり、登山道具なしで山脈を越えたりと艱難辛苦の1年8カ月の漂流を経て、27名の隊員、1人も欠かすことなく生還を果たす。絶望的な状況下で奇跡の全員帰還を成功させたその手腕と統率力が、リーダーシップのお手本ともされているのだが、生死の淵をさまようほどの思いをしながらかつてきた苛酷な旅は、何をもたらしたのか。シャクルトンは、手記のなかでこのように書く。

「記憶のなかで、私たちは豊かだった。見かけの虚飾など突き破った。私たちは、苦しみ、餓えながらも、勝利した。腹這いになって栄光をつかみ、大きく成長した。光り輝く神を見たし、自然の物語を聞いた。人間の裸の魂に触れたのだ」(南へーエンデュアランス号漂流)

自分の限界が試される旅で、シャクルトンは、もて



Hawaii Island
ハワイ島



Captain James Cook
キャプテン・ジェームズ・クック



Elysion
エリュシオン

8 画家ナサニエル・ダンス-ホランドが描いた、イギリス海軍の制服を着用したキャプテン・クック。グリニッジにあるイギリス国立海事博物館蔵。9 ハワイ島、ケアラケア湾の夕日。ここをエリュシオンだと思いついて、とるも仕方がない、と思えるほどの絶景。10 フランスのロココ時代の画家、アントワヌ・ヴァトーが描いた「エリュシオンの園」。ロンドンのウォーレス・コレクション蔵。

点で、富める者が犠牲を払うリジェス・オブリージュの精神を見ることが出来る。例えば、バウンティ号のブライ艦長が仕えたイギリスのキャプテン・ジェームズ・クック（1728〜1779）。キャプテン・クックは地上の楽園、ハワイ諸島をヨーロッパ人として初めて「発見」した。1778年のこと。

先住民の世界は一変した。巨大な船の到来と、見慣れぬ服を着た乗組員に先住民はおののく。いったんハワイを離れ、再訪したクックを、ハワイ島のカラニオプウ王はロノの化身と思ひ込み、神と崇める。酒池肉林のもてなしを受けたクックらは、まさに「地上の楽園」にいる気分であつたらう。

しかし、出航した後、メインマストが破損したために、クックは再度ハワイ島に戻らざるをえなくなる。この「人間的な」行動により、先住民は、神ならば船も故障しないはずなのに疑念を抱く。先住民らがデイスカバリー号のボートを奪い取ろうとしたため、クックはカラニオプウ王を人質として拘束。乱闘へ発展し、クックは殺害されるに至る。

自分を自分以上のものに見せてはいけないという教訓にも見える苦い最期であるけれど、クックはハワイ諸島「発見」のほかに、ニューファンドランド島とニュージールランドの海図を作成したり、世界周航の航海日誌を残したりと、後に続く旅人たちにとって役立つ多大な成果を残している。

それにしても、並々ならぬ苦勞を重ね、文字どおり命をかけて探検の旅を重ねたクックの望みは、何だったのだろうか？ クックはこうのように記している。「これまでの誰よりも遠くへ、それどころか、人間が行ける果てまで、私は行きたい」

人間が行ける果てまで。そこにまだ見ぬ地上の楽園があるならば、と旅立つ探検家は多い。一方、苦難だらけの暗黒世界が待っているとわかっていても出かける探検家がいる。

有名な新聞広告がある。南極大陸横断を志した、ア



11 パーマー半島があるドレーク海峡も探検家由来の地名。12 南極を探検したシャクルトン船の名は月のクレーターに。13 南米大陸南端のマゼラン海峡は、ポルトガル人航海者マゼランにちなんで命名。14 ニューゼーランドの北島と南島を分けるクック海峡はキャプテン・クックから。15 発見者であるオランダ人探検家タスマンの名がつけられたタスマニア島とタスマン半島。16 クック諸島もキャプテン・クックからの命名。

Palmer Peninsula, The Antarctica
南極 パーマー半島

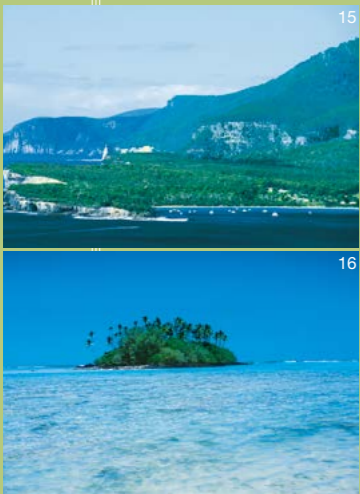


Sir Ernest H. Shackleton
アーネスト・シャクルトン卿

る資質（極限状態の旅においてはこれが「富」）をすべてフルに発揮し、神や自然や人間の魂の本質をつかんだ。その旅の記録は、極限状態における人間の行動や考え方の手本として、示唆に富む。学術的な成果ばかりか、生きる意味や知恵という宝物を持ち帰った旅人の高貴なふるまいのなかに、究極のリジェス・オブリージュの精神を見ることができないか。そんな旅人を、私たちは英雄として称え続ける。ゆかりの地に名前をつけることによつて、マゼラン海峡やクック海峡、タスマニア島にバンクーパー島、月のシャクルトン・クレーター。彼らの名を地図と記憶に刻み、その冒険の旅を語り継ぎながら、行きづまったときに、前へ進むためのヒントを旅の英雄から教えてもらうのだ。

今や地球上に前人未到の地などほとんどない。グローバルマップで検索すれば、地球上のおおよその景色がわかる。「秘境」に旅する人の写真も、SNSに溢れている。未知の場所への旅となれば宇宙旅行になるだろうが、宇宙の景色も遠からずグーグルやSNSで閲覧可能になるだろう。スピリチュアルブームというのは、そんな時代の反映かもしれない。残された未開の地である心の深淵を探検したいという願望の表れ。私たちの人生の長さは限られている。しかし、深さは測り知れない。宇宙であれ、心の中であれ、どんな「人間が行ける果て」の場所であれ、そこで出会いや発見は、自分の中を深く探検することによつて、初めて得られるものかもしれない。

Tasman Peninsula, Tasmania
タスマニア島 タスマン半島



Straits of Magellan
マゼラン海峡



Cook Islands
クック諸島

Cook Strait
クック海峡

8 Ann Peary Pictures/Pict Collection/Getty Images, 9 Photo Online/Getty Images, 10 AP Photo, 11 Eranit Mordekai/Getty Images, 12 Adam Ard/Corbis/Getty Images, 13 David M. Schaefer/Getty Images, 14 Galliano Todorov/Getty Images, 15 John W. Beninger/Getty Images, 16 Wolfgang Kerner/Liaisonphoto via Getty Images